

今だから言える

昭和57～昭和58年度下水道課長

酒井 雅夫

ゲッ！下水道課長ッ！ナンデマター！？アア、一番つきたくないと思っていたポストだったのに……。内示を受けた時の本心である。

ときは、昭和57年。10年にも及ぶ激しい反対運動もようやく下火となり、小矢部川流域下水道終末処理場の用地買収が曲がりなりにもようやくスタートしたばかり、全国ワーストスリーの一つとして、富山県の名が挙げられていた頃のことである。

現地では、まだまだ行政に対する不信、不満が渦巻いていた。そこには、絶対反対を唱えている集落もあり、賛成集落にあっても、中に入れば一枚岩とは言えない苦悩を抱え込んでいた。

就任して間もなく、厳しい反対抗議の洗礼を受けた。そこには、私利、私欲を離れた純粹さと、少数派の非愴さが漂っており、頑なさと、パフォーマンスを覗かせていた。そして、この人達の理解を得ることの困難さを再認識させられたのである。ただ、救いだっただのは、誰もが下水道はいらないとは言っていなかったことである。

この共通項を唯一のよりどころとし、よりよいものを目指して努力を重ねた。まず始めたことは、権威を網羅しての「下水道研究会」の発足であった。そして、汚泥の溶融による二次公害懸念の払拭と、2条管方式による初期投資の軽減を提案し、各方面の理解と協力を求めた。

現場は、バツカスのお力添えも得ながら、少しづつ前進して行った。先進地の視察、上流市町村との分担金割合、放流先の決定、地域振興施設の敷地の割り振り、公害防止協定の締結、地域の融和等々、時には課員にも秘密に事を進め、ウルトラC（当時の流行り言葉）を決めた事もあり、ほろ苦い思い出となっている。

いまだに残念な事は、宇余曲折を経ながら迎えた起工式に地元招待者の一部欠席を見たことである。前日の深夜まで、高岡市の担当部長と一緒に出席を要請して回ったが、欠席情報のあった人々とは遂に逢えなかった。

起工式も終え、ホッとしていた矢先、上司からもう一つの流域下水道、神通左岸について着手の目途をつけるよう尻を叩かれた。人使いの荒い県だ。

それから10年、二上地区は様変わりした。寒々とした刈り取りの終わった田圃、養鶏場の臭気、殺伐とした工場跡地。それが今は、大学校、県試験場、スポーツの殿堂などが林立し、若人が集い地域と一体となって発展の道を歩む。土地を手離し、所謂迷惑施設を受入れた代償。この評価は人様々であろう。

ただ、今でも言える。「二上の下水処理場は日本一の施設である」と。

当時、ご助力をいただきました皆々様に、心から感謝申し上げます。